

高・大・一般 漢字（草書）

加藤 東陽

十七帖（王羲之）
⑬



諸理（極差） 諸理（極めて差^{ちが}う）（政務が全く思い通りに運ばない）



〈解説〉

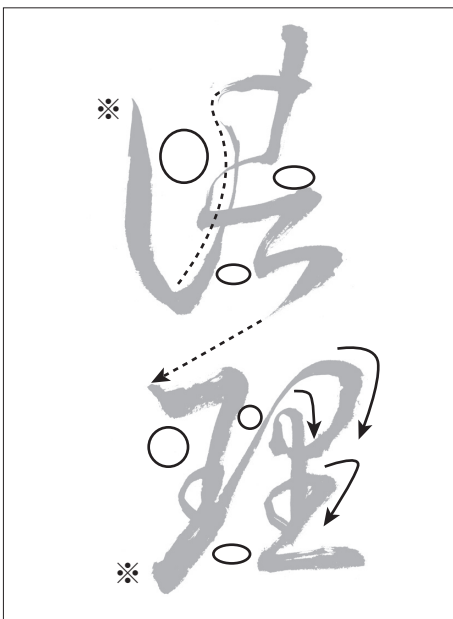
「十七帖」の文字は偏と旁を連携する斜画が
一様ではなく、さまざまな斜画が偏旁間（左右）
の余白の分割に変化を与え、それぞれ異なった
趣を醸し出しています。

草書は筆脈の流動性が強いので、一貫した運
筆の流れに偏と旁を「融け込ませる」ように書
くことが大切です。気脈が途切れないように努
めましょう。

〈学習上の留意点〉

「諸」：第一画目（図の※印）は、真上から落
筆し、筆鋒を内に蔵して（蔵鋒）、線に厚みを
与えます。対照的に、偏と旁を結ぶ次の右上払
いは一転して極細の線へ移行します。この細い
線は速い速度で書くと弱くなるので、あえて遅
筆にして「力を強める」ことが肝要です。

「理」：偏の「王」の終筆（図の※印）は、そ
の画の収めであり、次画（里）へ準備する場所
です。ここでの終筆の要領は、瞬時筆を止め、毛
の復元力を利かし次の右上払いを強くして、偏
と旁の密度（緊張感）を高めます。また、「里」
の連続する右旋回は単調に書かないように心掛
けましょう。



高・大・一般 漢字

新(10)級から五段までは作品用紙として画仙紙ハツ切り(68cm×17.5cm)又は、画仙紙半切(136cm×35cm)のみの出品です。
六段から八段までは作品用紙として従来通り画仙紙半切(136cm×35cm)のみの出品です。

見城 正訓



〔釈文〕紅蓮披早露

〔読み〕紅蓮 早露に披く

〔出典〕王樞「徐尚書坐賦得可憐」

〔意味〕紅色の蓮の花が朝露に濡れて咲く、の

意。昼の暑さを予感させる蓮の紅色と、
つかの間の涼を感じさせる朝露。夏の
早朝の情景を詠じた句。

〔解説〕

今回は行草書連綿の、一行書きを取り上げま
す。文字数が少なくなるほど「変化の要素」を
多く取り入れることが大切なので、文字の大小
だけでなく、筆の開閉を生かした「潤渴の変
化」を効果的に入れるよう工夫してみました。
二十三文字構成にし、「紅」「披」で墨継ぎ、
「蓮」「露」を渴筆で表現しています。

文字と文字とを繋ぐ連続する線が細いと、作
品から受ける印象が弱くなります。前の文字の
最終画の収筆から筆圧を弱めずに、次の文字へ
連続させる意識で書きましょう。



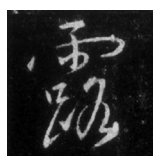
「紅」は墨を多く含み、「糸」を大きく、「工」
は添えるように書きます。

「蓮」は連続させやすいよう「草冠」の筆順を
変えて、「しんにょう」は筆を開き渴筆で表現
しましょう。



広く

中 小 大



集王聖教序より

「披」の手偏は一画目と三画目の空間を広く取
ると文字が大きく見えます。

「早」は草書で書いています。字典で字画を確
認しましょう。筆順は「日↓縦画↓横画」です。

上部は大きく、下部を小さくしています。

「露」は「雨冠」で字幅をとり、重心を高くす
ることがポイントです。

落款は左の空いているスペースに、字間を不
均等に配すると本文と調和すると思います。